

東海能楽研究会 年報

強吟弱吟の祝言望憶説に
対する疑問(横・主と地声・裏声)

小島 英幸

一 祝言の声は声楽の基本

世阿弥は「音曲声出口伝」の中で、祝言の声は強き音声で、息をいだし義にあたり、望憶の声は柔らかに弱き音声で、入る息の心であると述べている。この記述から、一般には、祝言の声が強吟、望憶の声が弱吟(柔吟)の起因になったとされている。しかし世阿弥の遺著をよく読めば、これはやや短絡的な考え方のように思われる。

世阿弥は「風曲集」においては、音声にわう(横)・じゅ(主)の二つがあり、横は「いづる息」の扱い、主は「いる息」の色どりであると述べている。また笛に調子を合わせる声出しは主であり、そのあとを横にうたい、最後は主に納めると説明している。これは望憶の声と同種の「入る息」で謡い出し、そのあとを祝言の声と同種の「出づる息」でうたい続けると言うことである。もし祝言・望憶が強吟・弱吟の起因であるとすれば、弱吟の発声でうたい出し、そのあとを強吟の発声でうたい続けることになり、すべての謡において、最初の部分で吟が混合し、すっきりした説明にはならない。

また申楽談儀の「音曲の事」
「祝言は呂の声」には、直ぐなる
かかりは祝言で、是を基本として、
開けたる位に上りて後は、幽玄・

恋慕・哀傷と自在になるとある
(これらは現今ほとんど弱吟でう
たわれる)。即ち世阿弥の言う祝
言の声(出づる息)は、強き音声
と呼んではいるが、強吟の発声に
よる声を指すのではなく、呼吸を
十分に利用する朗々とした声のこ
とであり、声楽の基本になる発声
法を指していると考えられる。

二 強吟と弱吟の差異

世阿弥時代の謡曲は、ふしの動
きは四度(下とファの間隔)まで
で、声明と同種の歌謡であった
(表・伊藤、金春古伝書集成、わん
や、三三三頁、三七九頁。仏教音
楽、音楽之友社、片岡、一六六頁、
金田一、八六頁)。現代謡曲弱吟
のふしは、高音部に五度(下とソ
の間隔)の動きをもつが、これは
室町末期に伝来したキリシタン音
楽等の影響と考えられ、この頃謡
曲の旋律が大きく変化した(田中、
四座役者目録、わんや、五五頁。
小島、観世五八巻三三三、東海能楽
研究会年報創刊号)。その後、旧
来の声明系謡曲旋律が強吟に変化
していったものと考えられる。
謡曲弱吟も含めて一般歌謡で

は、快い旋律を出すために倍音を
用い、旋律を構成する各音の高さ
が、倍音に基づく不連続的な階段
状にならぶ。しかし謡曲強吟では、
音高が上がる時、上音廻し節のツ
キ上ゲのように、音の高さが連続
的に上昇し、且つその上昇幅には
個人差があり、音階が不明瞭であ
る。現今の強吟では、上音と中音
は同じ高さであり、下ノ中音と下
音も同じ高さになりつつある。し
かし中音と下ノ中音の高さは異な
り、中音から下ノ中音に下がる時
は、多くの場合、下がる二・三字
前で音がうわする。しかしこの音
の上昇度にも個人差があり、弱吟
のように一定していない。これは
詞(ことば)の前半や、開きの後
で、音高が上がる時と似て居り、
場合によって、或は人によって、
その上昇度には差があることが多
い。このように強吟の特色は、倍
音に基づく発声法をすてたために
音階が不明瞭になり、音階のない
詞のうたい方に似ていることであ
る。

三 主は裏声の一種

現代の音楽教育においては、音
痴の矯正に、発声法として裏声を
用いることがある。裏声の方が、
普通の地声よりも調子を合わせや
すいことが知られている。この地

声・裏声と、世阿弥の言う「出づ
る息」「入る息」とは、両者の関
係が極めてよく似ている。世阿弥
は笛に調子を合わせる時には、主
すなわち「入る息」を用いるよう
に述べているが、この主は現代音
楽で言う裏声の一種を指していると
考えられる。従って祝言の声
(横)・望憶の声(主)は、現今
の地声・裏声とよく似た関係にあ
るように思われる。

四 世阿弥時代のクセと横・主

申楽談儀の「音曲の事」には、
拍子が基になっていた本来の曲舞
は、音の上げ下げばかりで成りた
っている旨記されているが、更に
「曲舞と小歌の変わり目」には、曲
舞は横・主とわけてうたうとある。
前述のように世阿弥時代の謡は声
明系で、ふしの動きは四度までで
あるから、この上げ下げによる二
音の間隔は四度であり、高音が主、
低音が横であったと推測される。
これは現代弱吟クセ前半部のふし
(中音、下音間の往復)と同じ旋
律になる。これを観阿弥が小歌ぶ
しを交えてやわらげ、小歌節曲舞
が生まれた。おそらく中音、下音
間に下ノ中音を使用したものであ
ろう。このふしは現今強吟に変化し
ているが、現行強吟クセ前半部に
その面影を認めることができる。

尾張徳川家藩主側近の演能活動について

山川 暁

平成九年より尾張藩の御抱能楽師であった大鼓方、大倉七左衛門家所蔵の「能囃子組」に記載された番組の整理・検討を継続して行っている。現在は正徳三年（一七一三）に至り、尾張五代藩主、徳川五郎太の時代までたどり着いたところである。この「能囃子組」は延宝九年（天和元年・一六八二）から寛政六年（一七九四）まで、極めて長期間にわたって尾張徳川家の催した演能を記した番組集である。この資料を通して、「武家の式楽」と一言で総括される江戸時代の能楽の、「式楽」とはどのような姿であったのか、その全容に少しも迫りたいと考えている。

尾張徳川家に重点を置き、近世大名文化の研究の視座から番組を読み解いていく中で、興味深く思っているのが、藩主自身による演能と藩主をとりまく側近による演能である。これまでにも尾張徳川家の能楽についてまとめられた論稿によって、二代藩主光友の時代には能を嗜む側近が多く、シテ・ワキ・囃子方まで側近のみでまかなうことができたことは知られていた。「能囃子組」の整理を通して、その実態がより詳細に把握できるとともに、このような能を嗜む

側近が三代藩主綱誠、四代藩主吉通の時代にも存在したことが明らかにされた。現在の段階では、番組中に記された数多くの名前（通称）の中から、役者と藩士をふるい分けする作業で精一杯であるが、ここではこれら通称しか知られない藩主側近の諱の比定および経歴の調査について、具体的な人物一名を取り上げて、その過程を書き留めておきたい。

これまでに分析を終えた範囲で「能囃子組」において最も演能回数が多い側近は、資料中で「津田敷負」「津田市正」と記される人物である。この人物はシテ方と小鼓方を勤めており、四十六回の番組に出演し、一回につき平均二曲を演じている。この人物を特定するために、まず江戸時代前期の尾張藩士の系譜集成である「士林派回」を検索すると、「津田」の項には該当する通称の人物が見当たらないが、二代藩主光友時代の能楽の上手といえは「玉置市正」が思い浮かぶ。そこで「玉置」の項で確認すると、たしかに諱が「直連」という人物の項に「始津田安之丞 敷負 後改玉置市正 後一千」との記述が見いだされる。以上のことから、この人物は玉置直連であることが確認できる。

「士林派回」の記述によれば、直連は初めに二代光友の小姓として召

し出されたが、年を重ねることに増加され、やがて大寄合末席として千石を領するまでになった。元禄五年（一六九二）にはさらに千石を加えられ、同心十二騎を預けられている。直連の昇進はこれにとどまらず、元禄八年には光友の隠居に伴って、光友付きの家老となり、さらに千石を加算され、合計三千石を領するまでになっている。「昔咄」によればこの時二十六歳であったというから、これを信じれば寛文十年（一六七〇）生まれということになる。これに加えて直連は、玉置家の本家を嗣いでいた次男直之を享保六年（一七二二）に亡くし、嗣子のなかった本家の家領三千石の内から千石を分け与えられている。

この玉置家は紀州熊野の出自で、秀吉の時代には伊勢の白子三千石を領していたという。大坂の役の時点では家康に仕えており、最終的に近江の蒲生郡に三千石を賜り、やがて尾張初代義直に仕えるようになった。この家康から宛られた近江の地が家領の三千石と考えられ、玉置家が尾張徳川家に仕えた後には、いわば尾張藩の飛地になる。「士林派回」では「御附属列衆」（幕臣から尾張徳川家に附属された家臣で、將軍に謁見の礼をとらない家）に分類されており、相当の家格であったと考えられる。

また、祖母が初代藩主義直の側室、貞松院の姫であり、叔父の直承は三代藩主綱誠の傅であるなど、尾張徳川家歴代藩主とつながりの深い家柄であった。また、祖父直次は茶道で名高い一尾伊織の実弟である。

「士林派回」から浮かび上がる玉置家および直連の事績は以上の通りであるが、直連をめぐるエピソードは諸書に散見される。四代吉通に近侍した近松茂矩が綴った「昔咄」に限定しても、將軍綱吉が催した江戸城二の丸の能で「江口」を勤めた光友のツレを演じたことや、光友の命で金春八左衛門、大蔵求女の指導のもと「石橋」を稽古し、見事に修得したこと、またこの玉置家には奇怪な霊崇がつきまといつていたという不思議な噂も記されている。また、世間にはその昇進ゆえに光友と恋愛関係にあったとの説も流れていたようで、著者茂矩はそれは誤りであるとも記している。

このように玉置直連という藩士ひとりに限っても、家および人物に対して数多くの情報が知られる。今後能を嗜んだ側近の事績を集め続けることによって、どのような新しい研究の展望が開けるのか、まだ見えてこないが、これからも「能囃子組」の分析と平行して関連資料を蓄積していきたいと考えている。

新井白石と能

―能好き將軍への「進言」記事の真意―

米田 真理

新井白石は、徳川六代將軍家宣と七代家継、その側用人であった間部詮房に政治的助言を行い、いわばブレンとして活躍した儒学者である。家宣といえは能を愛好した將軍として著名だが、そうした家宣の態度に対して自分が進言を行なったことを、白石は著書「折たく柴の記」の中に記している。

それは、家宣がいまだ將軍の後継者の立場であった宝永三年三月十二日のこと。白石は家宣への講義の中で、伶人や俳優を重用したために身を滅ぼした、後唐の皇帝莊宗のことを述べた。講義の終了後、詮房を通して將軍に差し上げた手紙には、「異朝の伝奇・雜劇など申す事は、すなはち今の散楽にさぶらふなり。（略）かの莊宗の事は、後の人主の鑑させ給ふべき御事にこそ侍れ」と記し、治世を行う將軍が能を好むことを諫めたのである。その後、ある人から、なぜ家康公や秀忠公も能を演じていたのに差し支えあるのか、との質問をされた。白石はこれに対し、家康公や秀忠公が明け暮れ能ばかり行なっていたのか、また、天下を治めた後も能を行なっていたのか、などと逆に問いつめた。白石は、こうした

経緯を記した後、「これらの事によりしにや、御代しろしめされしもの、某して、此事を見せ給ひし御事はあらざりき」、すなわち、家宣が將軍となつてから、白石に能をお見せになつたことはなかった、と記している。

じつさい、白石は、將軍家宣の周辺で行われていた演能のうち、「奥能」と呼ばれる、日常的・趣味的性格の強い非公式の演能には、全く招かれていない。それどころか、白石の江戸城出仕と奥能が同じ日に行われることすら、まれであった。「新井白石日記」(以下、「白石日記」と略す)や、將軍家宣の日常を記した「間部日記」(内閣文庫蔵)、家宣周辺の能番組である「御内証御能組」(伊達文庫蔵)などによれば、家宣の治世であった約四年間に、白石の江戸城出仕は計二九三日、奥能は計二二七日を確認できるが、これらが同日に重なっているのは、わずか計十三日のみ。このような日は、午前中に白石が出仕し、白石の帰宅後、午後から能が行われるというパターンなのである。

前掲の「折たく柴の記」の内容からは、家宣が白石に観能をさせなかったという事実に対し、あたかも白石の進言が家宣に影響を及ぼしたかのような、白石の自負が窺われる。しかし、家宣の没後に起筆された、いわば回顧録である「折たく柴の記」

に対し、日記である「白石日記」からは、白石と能との関係について少し異なる印象を受ける。

そもそも家宣は、三代將軍家光の次男であった父の跡を継ぎ、甲府藩主として江戸城桜田近辺の屋敷(桜田館)に住していた。この頃から家宣はしばしば演能を行っていたようだが、白石が観能したのは、年に二、三回の割合でしかない。その際も、「白石日記」元禄十三年十二月二十日条に「夜、宮内殿より手紙来り、明日御能二付、拜見ニ可罷出之由」(宮内殿)は間部詮房のこととあるように、前日にあらかじめ連絡を受けてのことであった。元禄九年八月十五日条には「出仕、御能故罷帰」とあり、出仕はしたものの演能があったので帰宅した、と記されている。これは、決して白石が能を見たくないので帰ったわけではなく、見せてもらえる立場になかったからだと思われる。

そして、家宣は、五代將軍綱吉に跡継ぎがなかったため、宝永元年(一七〇四)十二月、綱吉の養子として江戸城に入る。この時期は、綱吉と家宣が一緒に私的な能を催すことが度々であった。しかし、「白石日記」を見る限り、白石はこうした能を観ていない。つまり、前掲「折たく柴の記」に記されるところの進言の前

後で、白石の観能の状況に変化はないのである。

儀式的・公的な演能である「表能」に関しては、宝永四年八月三十日、家宣の若君誕生祝儀能に招かれ、拜見にあずかっている。また、宝永六年五月には家宣が將軍に就任したことを祝う將軍宣下能が行われたが、それにも白石は招かれている。宣下能初日の前日である五月十四日条の「白石日記」の記事を見ると、「越前殿御申、寄合衆はかさねて両日二御能御見せ候事二候、其方事をは明日出し候へよし、若年老中へ被仰付候間、さやう可相心得之旨」、つまり、間部詮房(越前殿)の伝えることには、家宣が、白石にも能を観せよう老中たちに仰せられたというのである。また、宣下能当日の十五日条では、「今日白石以上御能拜見、某も拜見」と記され、一万石以上の大名たちに混じって観能したことを、誇っているかのような書きぶりである。

しかし、家宣が將軍に就任したことで白石の地位も向上し、五百石取りの幕臣となった後も、將軍の周辺で私的に行われる奥能には、これまでどおり、招待されることはなかった。奥能には、家宣の甲府藩主時代から勤仕していた、間部詮房ほかの近習が常に参加もしくは参観していた。彼らは、將軍の日常生活に密着した

「中興」の役人たちがであり、政治や儀式をとり行う「表向」の役人とは、大きな区別があった。奥能には、「表向」の役人は、たとえ老中といえども、許可なくして立ち入ることができなかったのである。こうした性格を持ち、多いときには二、三日に一回の割合で行われていた奥能に、自らが招かれなかったことを、白石はどう感じていたのだろうか。実際には効果があったとは言いがた、解釈によっては家宣批判とも受け取られかねない、かの進言のことをわざわざ記録したのは、自分が奥能に招待されていなかったことに、理由を付けたかったからなのではないだろうか。「白石日記」の、將軍宣下能に招かれた日の喜びあふれる記事と比較するにつけ、傑物白石の、人間臭い一面がほの見えるようでない。

狂言絵を読む・事始

藤岡道子

服部幸雄「江戸の芝居絵を読む」は魅力的な絵解きに満ちた書であるが、中でも「大小の舞」の考察はそこに付された華麗な一葉の役者絵図とともに忘れがたい章であった。内容不明の狂言「大小」を役者の腰に差した御幣から読み解くのであるが、

それを受けて永井猛「若衆のいる狂言舞台図」(芸能史研究131)では同様の図像から筋の推測をおし進める。不明曲「大小」の狂言が絵画から読み解かれていくおもしろさ。文献の傍で絵画もまた狂言解読の有力な手がかりであることは確かであろう。

図様の古態によって「狂言古図」と呼ばれているのである。Aは特定本の挿絵とするために描かれ、他の狂言絵画とは無関係に孤立する作品である。しかしBは狂言絵画群の中に単独に存在する作品ではなく、類似の仲間を持つている。そのことについては別稿で述べることになるが、本稿においては「狂言古図」のように類似の仲間をもつ狂言絵画につき、二件の報告をしたいと思う。

Iの①「能狂言絵巻」(卷子一巻) 24図 弘文社敬愛図録II 昭59

②「能狂言図巻」(卷子一巻) 24図 橋本美術館蔵

ここに二、三十年、歴史学の分野で新たな地平を展きつつある絵を読むという方法。絵画を資料とすることの限界や盲点を認めつつなおあり余る魅力を湛える資料群を特に狂言に焦点をあてて集めたいと考えている。狂言絵画資料群の総集は未だ成されおらず、既に報告された作品はもとより未報告の新資料を探査し、名称、所在、経歴などを明らかにして分類と整理を行い、画証として何が読みとれるか考えていきたいと思う。画証として絵画を用いる時、制作時、制作者、制作目的が明らかでない限りはならない。絵画が資料としてアプナイのは往々その点の確認ができないからである。今、狂言絵画として手近かな万治三年刊「狂言記」挿絵(A)と「狂言集成」所収「狂言古図」(と呼ばれているもの)(B)をみてみよう。Aは制作時、制作者、制作目的がほぼ明らかである(拙稿「万治三年刊「狂言記」挿絵の諸問題」聖母女学院短大紀要27)。一方Bはどの点についてもわかっていない。ただ

①、②が近い関係をもつことは巻子の形状、収載曲目、構成構図、年記等から明白である。①は弘文社の高価古書販売目録で6曲の画面写真が付されている。解説の一部を引くと、「寛文頃写 極彩色 伝菱川師宣画 一巻 一、五〇〇、〇〇〇円 (略)能及び能狂言の種々の演目の舞台姿を集めた絵巻。能と狂言とを交互に出して、演技者の顔貌・衣裳、及び作り物を叮嚀詳細に描写し、金銀泥を加えた極彩色で彩っており、華麗な感じ。一番毎に、画面の上に金砂子蒔きの小短冊を貼って曲名を題し、全巻二十四番、内、能十三番、狂言十一番。すなわち左の如し。 翁・高砂・狂言あそび・たむら・

狂言文相撲・井筒・狂言宗論・舟弁慶・狂言船渡舞・三井寺・狂言法師が母・自然居士・狂言せいらい・賀茂・狂言御田・よりまさ・狂言遊善・松かせ・狂言はな子・道成寺・狂言彌宜山伏・三輪・狂言福の神・狸々 巻末に、八角形の中に「菱川」として朱印が捺してあり、古い塗箱には「菱川師宣筆」としてあるが従われない。但し時代は師宣の青壮年時に相当しよう。能狂言絵として古い部に類し属する。(略)図録所載の写真は右の曲名に傍線を付したもので、その6図と、②の当該曲を比較すると、画面における人物の比率、人物の配置、姿態(演技)はほとんど同じで、相違するのは②の翁に大鼓方と千歳、自然居士に舟頭、花子(後場)に太郎冠者が描かれていること、道成寺が①は後場であるのに②は前場であること、である。また衣服の紋様、顔の表情などは違う。②の箱書にも「寛文頃写」とあり、①と②は直接書写関係にあるか、同系統の粉本を用いて能狂言絵の型を襲いながら、絵師それぞれの自由裁量の余地も残して描かれた二作品と考えられる。脇能から祝言切能へという以外にもある選曲意識が見え(たとえ「頼政」の次になぜか「遊善」を配するなど)、画証としていくつかの

示唆的な課題も含んでいる兄弟本である。

IIの①「能狂言之図」国立能楽堂蔵 (画帖一冊) 13図

②「山脇流(狂言図)」徳川美術館蔵 (画帖三冊) 161図

①と②には10図の共通曲があり、それらはIと同じような意味できわめて類似した画像として描かれている。①、②の伝来等の経歴は不明のようにだが、ともにともとは卷子本の形であったらしいこと、Iと類似する曲もあること等から、ここでも狂言絵に類型の流れがあったことが見えてくるように思う。規定の紙幅が尽きたので、内容の詳細については別稿、とさせていただく。

(絵画資料の性格として現物を手にとることの、また並べて比較することの困難さ。これをいかにしよう。ともあれIの②は大阪大 天野文雄氏に、IIの②は徳川美術館 山川暁氏に存在を教えてくださいました。記して感謝申し上げます。)

梶田本天正九年二月

奥書謄伝書

尾本頼彦

今年二月の東海能楽研究会例会会で「梶田本天正九年二月奥書謄伝書」(「梶田本」と略称)の翻刻と研究に

ついで報告したので、その概略をここに紹介する。

本書は、三重県尾鷲市に在住される梶田正真氏所蔵の古文書で、平成十年五月に上野市総務部市史編纂室で目録を作成したばかりの新出文書二百五十一点のうち、唯一の能関係文書である。梶田家は系図によれば、初代梶田正真久左衛門が慶長四年に伊予宇和島にいた藤堂高虎に三百石で召し抱えられたのが初めて、慶長十三年に高虎が伊勢に国替になった時一志郡小森村に三百石の知行を拝領し、代々藤堂家に仕えた家である。袋綴一冊縦二八三、横二〇二(ミリ)、外題、内題とも書名を記さない。共表紙で、表紙裏とも白紙である。墨付三十八丁からなり、裏表紙はない。

1. 奥書

「梶田本」の奥書を、年記、相伝者および被相伝者について抜き出すと、「天正九年二月吉日 観世小次郎元忠判 瀧連与老」(慶長十二年二月吉日 瀧左馬入蓮与 勝吉判 佐々木本馬之助殿)「元禄五年五月廿九日 伊洲上野にて写之候」の三つである。天正九年二月時点で観世小次郎信光はずでに死んでおり、観世元忠宗節は在世中であるが、宗節が「小次郎」と称したという従来知見はない。しかし、伝書を贈られた人物の、「瀧連与老」は、次の慶長十二年二月の奥

書の伝書を譲り渡した人物の「瀧左馬入蓮与 勝吉」と同人物と考えられる。又この時伝書を贈られた人物「佐々木本馬之助」(佐々木右馬之助と読む可能性もある)と「瀧連与」なる正体不明ながら無名の人物は実在の可能性が高い。さらに慶長十二年の奥書によると、「佐洲様(寛政重修諸家譜)の佐渡守であった人物中では藤堂高虎が該当する)がこの伝書をご希望しておられ、かつ瀧左馬入蓮与が佐々木本馬之助(佐洲様の家臣と思われるが、「功臣年表」等には見出せない)と同国で、佐々木本馬之助が謡への執心が強いために伝書を残らず書き写し遺す」となっている興味深い。

2. 異本

「梶田本」は調査の結果他に従来公知の二種類の異本、早稲田大学演劇博物館蔵の「鄂曲蜜伝」と能楽研究所蔵の「神宮文庫本鹿芥抄 坤巻」(「神宮文庫本」と略す)が存在することが判明した。異本は奥書が一種類であり、「天正九年二月吉日 観世小次郎元忠判」部分は「梶田本」と同一である。「鄂曲蜜伝」には被相伝者名はなく、「神宮文庫本」には「瀧連与老参」となっていて、「梶田本」の「慶長十二年」奥書の相伝者である「瀧左馬入蓮与 勝吉」を指していると考えられる。「天正九年二月」の

奥書は相伝者が観世宗節と断定しにくい人物であるためかえて年記自体に疑問が持たれるが、「梶田本」の慶長と元禄の奥書は信用が置けるものであるのが貴重である。中村格氏が「井筒の主題と幽玄」(観世昭和五十一年四月号)にて「鄂曲蜜伝」の一部の文章を引用され、竹本幹夫氏も「岩波講座能狂言II 能楽の伝書と芸論」(昭和六十三年三月)で「神宮文庫本」を紹介され、「種々の能・謡説の集成で、個々の内容は室町末期頃のもの」と認めうる」という従来の「鄂曲蜜伝」系伝書に対する評価を補強する傍証を提供するものと言える。

3. 「梶田本」(「鄂曲蜜伝」系伝書)の特徴

3. 1 「弘治三年一噌似齋奥書伝書」に次いで古い、翁の室町期の上掛りの詞章を持つ。 3. 2 四日分の詞章としては最古の翁詞章である。(天野文雄氏の「翁猿楽研究」(平成七年二月)には「鄂曲蜜伝」系の詞章についてはコメントされていない。) 3. 3 室町後期の能の演出資料を含んでいる。中村格氏が前掲資料で紹介済みの「井筒」の外に、「杜若」の「しらはやし」、「定家」の「露のひほとき」、「三老」という表現で「関寺小町、松垣、おおむ小町」の三曲をあげていること等

ある。

3. 4 「自家伝抄」系伝書にある「能の序破急の位付」と「十体之次第」と「物狂に数多の心あり」が、「実鑑抄」系の「永正本元伝書」程の改変を受けない形で存在する。

3. 5 「梶田本」の過半は、「塵芥抄」系諸説を含む謡の謡方に関する伝書である。

3. 6 「梶田本」の五音説は「八帖花伝書」と同系統である。「八帖花伝書」の五音説は「梶田本」系伝書と弘治三年大藏道人写の「五音三曲・能之心得花伝之ぬき書」系伝書を参考にして編纂されたと考えられる。

終わりに、本書の利用を許された梶田正真氏に感謝するとともに、本書の存在を連絡いただいた久保文武氏と「佐々木本馬之助」のよみと佐洲様が誰かについて御教示をうけた山川暁氏に御礼申し上げる。

《会員の新聞紹介》

『近世能楽史の研究』

—東海地域を中心に—

飯塚恵理人著

(一九九九・二、雄山閣、一万六千円)

本書は、東海地域の能楽がどのような人々によって維持されて来たのか、さらには能楽が近世・近代の東

海地域にどのような文化的影響を与えたのかという視点でまとめられたものである。著者が平成六年から同九年にかけて発表された論考が収録されている。

章立ては左のとおり。

序章 東海地域能楽史の研究とその意義、第Ⅰ部 尾張藩御役者の事蹟をめぐって 第一章 金春八左衛門・林家(金春喜左衛門家)の代々、第二章 金春流より宝生流に転流させられた家、第三章 金剛流寺田家年譜考、第四章 観世流木下家年譜考、第五章 平岩加兵衛家年譜考、第六章 明治維新期における尾張藩御役者の境遇、第Ⅱ部 東海地域における市井の能楽、第一章 熱田神宮と能役者、第二章 「龍口寺靈宝開帳記 附録」に観る「仙助能」の芸態、第三章 「女謡曲採要集」に観る名古屋の女能、第四章 熊野本宮大社の能楽

『一子相伝之秘書』

雲形本研究会編

(一九九八・六、八木書店、九千円)

狂言和泉流十四世宗家の山脇和泉元業が書き留めた狂言の秘伝書を影印版で公刊したもの。三番叟についての秘事が多いが、風流や間狂言、さらには狂言全般についての趣意について、元業の認識が披瀝されている。

東海能楽研究会活動記録 (平成9・10年度)

平成9年3月10日 大倉七左衛門家蔵『能囃子組』にみる尾張徳川家の演能 山川 暁氏

5月11日 『和泉流狂言六儀拔書』紹介 野崎典子氏

7月27日 高安流宗家所蔵『系図』と『脇極意見聞書』について 辻 宏一氏

11月2日 六代將軍家宣周辺の能—日常と演能—近従の人々— 米田真理氏

平成10年2月8日 世阿弥の修羅能の編年の位置付 尾本頼彦氏

4月26日 新城における泉祐三郎 栗花光弥氏 飯塚恵理人氏

6月28日 『和泉流一子相伝之秘書』 野崎典子氏 安田徳子氏 林 和利氏

9月6日 伊勢門水の狂言画 藤岡道子氏

11月29日 世阿弥関係遺著の音楽学からみた新解釈 —祝言・望憶と曲舞— 小島英幸氏

平成11年2月7日 梶田本天正九年二月奥書謡伝書の翻刻と研究 尾本頼彦氏

東海能楽研究会年報 第三号

一九九九年(平成十一年)三月三十一日発行

代表者 筧 敏一

幹事校 名古屋女子大学 林研究室

〒467-0003 名古屋市瑞穂区汐路町三十四〇

印刷者 共生印刷株

書誌や成立・筆者・内容解説等について、野崎典子・佐藤友彦・安田徳子・小谷成子・林和利の諸氏による解題を付す。